

# 『言語学少女とバベルの塔』

seren arbazard



<目次>

言語学少女と図書館とふたつの嘘	……5
言語学部	……16
伝統的言語研究・比較言語学	……30
ソシュール・バベルの塔	……48
音韻論・音声学	……54
類型論	……69
形態論	……83
武道会	……103
統語論	……110
意味論・諸論	……125
認知言語学・機械翻訳・言葉と文化	……147
アンチバベル	……169
告解	……175
7月19日	……177
人工言語	……178
すれ違うふたつの同じ嘘	……192
あとがき	……194
参考文献	……202
索引	……205

「『走る』は英語では run。これは誰でも知ってる。

フランス語では courir。course（コース）などと同じ語源だ。

ドイツ語では rennen。英独は兄弟関係にあるから run に似ているよ。

イタリア語では correre。仏に似ているね。

スペイン語とポルトガル語では correr。伊とほとんど変わらない。

ラテン語では currere。仏伊西葡が似ているのは、どれも元がラテン語だからだ。

ギリシャ語では τ ρ ε χ ε ι ν。車のトラックの語源は車輪だが、この語まで遡れる。

ロシア語では б е ж а т ь。カタカナにするとビジャーチといったところかな。

アラビア語では رَكَنٌ。文字だと右から rakaDa と読むから注意だ。

フィンランド語では juosta。語幹は juoks だが、不定詞にすると juoks+ta が juosta になる。

韓国語では 달리다。日韓は文法は似ていると言われるが、固有語同士はそうでもない。

そして中国語では跑。もはや『走』という字ですらないんだ」

流れる水のように各国語を呟いた僕を見て、彼女は涼しげな顔で問い返した。

「——じゃあ、『走る』と『歩く』の違いは？」

<言語学少女と図書館とふたつの嘘>

高校の図書館。小雨降る6月の放課後。

僕は語学コーナーで気になった背表紙を手にとろうとした。

すると白く細い指が同時に背表紙に触れ、僕はとっさに左を見た。

そこにはふわふわした亜麻色の髪の子がいた。彼女は隣の言語学コーナーから手を伸ばしていた。

「あ、どうぞ」

とっさに手をどけると、彼女も同じタイミングで「どうぞ」と手をどけた。

それが面白かったのか、あるいは気まずさを紛らわせるためか、彼女はクスッと笑った。

僕が笑い返すと、彼女は猫のように丸い眼でこちらを見つめた。外国人の血が入っているのか、宝石みたいな緑の瞳をしていた。そのまま飲み込まれそうな深い瞳だった。

思わず緊張した僕がとっさに目を逸らそうとすると、彼女はそっと呟いた。

「語学と言語学は近いようで遠い。

——貴方とわたしの距離は？」

「え……？」

それは小さな囁きだった。聞こえなかったことにすれば無かったことになる言葉。だけどそれは不思議と僕の胸に突き刺さった。

「語学が好きなんですか？」

肩より少し長い髪を掻き上げながら、「語学」と書かれた棚を見上げる彼女。

「うん、まあ」

正直、語学には自信がある。相当な知識があるといっても過言ではない。

「じゃあ『走る』をいくつかの言葉で言えますか」

彼女は試すかのように尋ねてきた。

だから僕は持ち前の語学の腕を活かして、冒頭のように述べた。

14ヶ国語も並べたてた僕は、尊敬の眼差しを得るものと期待していた。

だが彼女が返したのは「『走る』と『歩く』の違いは？」という問いだった。

僕はとっさのことで頭が真っ白になった。そんなこと、考えたこともない。

「歩く」が walk であるとか、中国語では「走」と書いて実は歩くという意味なのだから、そういうことならいくらでも知っている。

だが「走る」と「歩く」の違いなど考えたこともなかった。

混乱する僕を前に彼女は小さく微笑むと、「それが語学と言語学の違い」と言った。

「言語学……」

「語学と言語学は近くて遠い。

どちらも言葉を対象とするけど、言語学は言葉そのものを研究する。

本棚はいつも隣同士。よく同じ分野だと誤解される。だけど実は両者の距離は遠い」

物理的には近くとも実際はそうでない。まるで今の自分たちのようだった。

「じゃあわたし、行くね」

彼女は桃の香りを残して去っていった。

僕は思わずしゃがみこんでしまった。

自分は子供のころから語学が得意で、言葉に関しては何でも知っている気になっていた。

理系クラスにいるのに語学が好きで、文転しようか迷っているほど好きだった。

だが実際には、母語の単語の意味の違いも説明することができなかったのだ。

彼女は唐突に現れ、僕に新しい世界を見せて去っていった。

不思議な子だったな……。

ふと彼女の端整で愛らしい顔が思い出され、顔が赤くなる。まるで妖精のようだった。

立ち上がろうとした際、足元に何か落ちていたのに気付いた。

「学生証だ……」

定期入れの一番上に学生証が入っていた。彼女のものだろう。写真の顔が同じだ。

学生証には初月綺夢と書いてあった。「シヨゲツキム？」と思ったが、ローマ字で Miyu Hazuki と書いてあるので「はづきみゆ」と読むのだろう。

「みゆ……か」

どうやら学年は自分と同じく3年らしい。ともに受験生だ。

学生証によると、クラスは文系特進科のようだ。理系の自分とは異なる。

届けたほうがいいよな……。

腰を上げ、図書館を出て昇降口へ降りる。外は小雨が降っていた。

翻って相手のクラスに行くべきか。いや、今はもう放課後だ。帰宅部なら帰っているだろうし、部活をやっているなら部室にいらろう。

明日にするかと思ったところで、見知った顔が歩いてきた。その顔はこちらに気付くと、顔の分際で手を振ってきた。頭は何でも体のパーツに命令できていいよな——などという考えがよぎった。

「よう」と気さくに声をかけられた。

クラスメート兼友人の大河原丈士だ。「おおがわら」と呼ばれるのを嫌う。正しくは「おおかわら」だそうだ。下の名前は「じょうじ」と読みたくなるが、そこは堪えて「たけし」。居そうで居ない、居なそうで居そうな名前だ。

「部活はどうした、丈士」

こいつは女にモテるためだけにテニス部に入ったような愚か者だが、いつも陽気でひょうひょうとしているせいか、どこか憎めないところがある。どちらかと言えば愚直なタイプの僕と性格が違うのに上手くやっていけるのは、こいつの人懐っこい性格によるものだろう。

「この雨じゃコートはびしょびしょ。体育館で基礎トレしかできん」と肩をすくめる。「で、帰宅部のお前さんは？」

「ああ、この子の学生証を拾ったので届けようと思うんだが……」定期入れを見せる。「居場所が分からなくてね」

「初月綺夢じゃないか」

「流石女のことには詳しいな」

「おいおい」驚いたような呆れたような顔になる。「学年首席の初月だぞ。お前、どこの学校の生徒だよ」

「そんなに有名なのか」

「容姿端麗、頭脳明晰、更に性格まで良いときた。いわゆる高嶺の花だな。ある意味誰も手を出せん」

ウチの学校は理系>文系という明白なカーストが存在する。文系クラスは理系の授業に着いていけない連中が落ちていくところというイメージがある。綺夢という子は文系クラスにもかかわらず、学年首席らしい。稀にそういう根っからの文系人間がいるものだ。

「ふうん」あまり関心のないふりをしておく。「で、その高嶺さんが何部か知ってるか」「ああ」一瞬言いよどむ。「図書館とコンピュータ部の間に小さめの教室があるだろ？　そこでなんちゃらかいマイナーな部活をやってるらしい。3年の6月なのにまだ引退しないそうだけ」

丈士に礼を言うと、僕はなんちゃら部に向かって歩いていった。思い出せないほどマイナーな部活というのは一体何なのだろうか。宗教？　オカルト？　ミステリー？　いかん、頭がぐるぐるしてきた。

はたして図書館とコンピュータ部の間には小さな教室があった。ふつうの教室には前後にドアが1枚ずつあるが、ここは狭いのでドアが1枚しかない。

唯一の入り口にはポスターが貼ってあった。ポスターの内容は何かの絵画だ。崩れた塔のように見える。これは一体何なのだろう。

ドアの上には印字された明朝体で「言語学部」と書かれたプレートが貼ってあった。「言語学部……」

少なくともオカルトの類でなくて良かった。

コンコンとノックすると、中から「はい」と声がした。

「すみません」と言って入ると、中はやはり通常の教室の半分ほどの広さだった。左手の本棚にはたくさんの本が並んでおり、奥には窓があり、右手にはホワイトボードがある。中央には四角いテーブルがあり、先ほどの少女がドアに相対して座っていた。椅子はパイプ椅子が2つしかない。他の椅子は折りたたんで窓辺に立てかけてある。

部屋の中には先ほどの綺夢という少女しかいなかった。まさか部員は彼女だけということはあるまいかと邪推する。

「あっ、さっきの」



彼女は少し驚いた風だった。僕としては「学生証が落ちてたので、帰りがてら寄ったままで。別に君を追ってきたわけじゃない。なに、礼には及ばない」などとスマートに告げて颯爽と立ち去りたかったのだが、そんな気風の良いことを知らない女子の前でさらっと言うてのけられるのは丈士くらいなものだ。

「あ……あの……が、がが、学生証……」

どんなどもりだ。いつから吃音を患った、自分。しかも小声とか。

「え？」

聞き取れなかったのか、彼女は立ち上がって近付いてきた。ふわっと桃の香りが漂い、僕は余計に困惑した。

「おち……落ちてた……から」ずいっと無愛想に定期入れを差し出す。もはやストーリーでないことを主張するので精一杯だった。

語学など、自分の得意な分野の知識をひけらかすときは口がよく回る。だが日常生活における日常会話を女の子とスムーズにできるほど僕は器用ではなかった。

「やだ、わたし、なくしちゃってたんだ」学生証を受け取ると嬉しそうに微笑む。「ありがとうございます」

「いや……別に」

微笑みかける彼女。目を背ける僕。

このまま沈黙が10秒。この10秒は長すぎる。あまりに気まずい。拷問といってもいい。

「……じ、じゃあ」

なぜ10秒間も黙っていたのか、僕には分からない。何かこれ以上のイベントを期待していたとでもいうのか。さっさと渡して10秒前に帰れば、せめて気持ちの悪い男でなく親切な人のままでいられたというのに。

「——答えは一緒に届けてくれないんですか」

気まずい沈黙に耐え切れなくなって部屋を出ようとした瞬間、彼女はそう呟いた。

「え……」

思わず振り向く。

「学生証、確かに受け取りました。でも、『走る』と『歩く』の違いの答えはまだです」

彼女は胸の前で定期入れをきゅつと握って僕を見つめていた。窓辺から差し込む西日が赤い。おかげさまで、多分僕の顔が赤いのはバレていない。

「ここ……部活なの？」おそるおそる問う。

「はい」無邪気に微笑む。「言語学部です。わたしは部長の初月綺夢。貴方は？」

自己紹介をすると、彼女は「せっかく届けてくれたんだから、お茶くらい飲んでいってください」と言ってパイプ椅子を引いた。

僕は言われるままに座った。彼女はお茶を淹れる。

本棚を眺める。新書から専門書まで様々だ。小さいものだと岩波新書の金田一春彦『日本語』上下巻。大きいものだと三省堂の亀井孝『言語学大辞典第6巻術語編』。大きさも格調も異なる様々な本が所狭しと詰め込まれていた。

本は一応ちゃんと並べられていたが、サイズやジャンルごとに整理されているようには見えなかった。ただきちんと収まっているだけで、分類された形跡がない。本当に読んでいるのだろうかと疑いたくなる。買うだけ買って読まない人間の本棚というのは得てしてこういうものだ。

「これは……ずいぶんな量だけど、全部読んだの？」

「はい」お茶をテーブルに置きながら、彼女は僕の前に座る。

「それにしてはジャンル分けとかがされていないような」

「全部覚えてますから」ケロッとやってのけた。「どの本の内容も、どこに何が置いてあるかも」

見かけによらず大口を叩くものだ。お茶を一口含んで気持ちがりラックスしてきたのもあって、ちょっとからかってやりたい気持ちになった。

「本当に？　じゃあ後ろを向いて。ええと、影山太郎『日英対照動詞の意味と構文』はどこにある？」

「左から2番目の棚の上から3段目のところにあると思います。シリーズ物ですよ。青い表紙の形容詞・副詞編は左から4番目の棚に、緑の表紙の名詞編は同じ棚のひとつ下の段にあります」

調べてみるとまさに言われたとおりだった。学年首席だけあって凄まじい性能の記憶力を持っているようだ。物事を整理できない人は頭が悪いとよく言うが、頭が良すぎると整理する必要すらなくなるのかもしれない。

ということは、ここにある本を全部読んだということも恐らく本当なのだろう。思わず嘆息した。

「あの……」彼女は戸惑うように口ごもった。「同じ学年ですよ。丁寧語を止めてもいいですか？」

「あ、うん。遠慮なく。てゆうか、ふつうにそうして」

そのほうがこちらも緊張してどもったりしないで済む。

「よかった」にこりとする彼女。「わたしあまり丁寧語って得意じゃなくて。なんだか距離を感じるから」

それは僕との間に距離を感じたくないということだろうか。また顔が熱くなる。

「初月さんは……」と言いかけたところで、「綺夢でいいよ」と言われた。ずいぶん親しげだなと思った。これはもしや僕に気があるのではと思ったところで、「みんなそう呼ぶから。初月さんっていう言い方には慣れてないの」と言われて、ちょっとがっかりした。

「じゃあ綺夢……は、一人でこの部活をやってるの？」

「ううん」彼女もお茶を飲みながら首を振る。「もう一人いるよ。今日は生徒会があるから来てないけど」

ああなるほど、それでパイプ椅子が2つ置かれていたのか。しかし2人しかいない部活というのはどうなのだろう。よくそれで部活として成立するものだな。

「ところで『走る』と『歩く』の違いについて考えてみたんだが、『歩くより速い移動が走る』で、『走るよりゆっくりな移動が歩く』と言えばいいんじゃないか」

「ううん……」綺夢は口ごもった。「それには問題が2つあるね。『走る』と『歩く』の説明の中で『歩く』や『走る』などという言葉を使うのは循環定義といって、あまり良くないこととされているの」

「循環定義？」

「例えば辞書で『大きい』を引いたとき『小さくない』と書いてあって、『小さい』を引いたとき『大きくない』と書いてあったら？」

「使えない辞書だと思う」

「——よね。循環定義っていうのはそういうこと」

「実際にそんな馬鹿げたことがあるのか」

「流石にそこまで露骨なのはないけれど、辞書——とりわけ古い辞書には循環定義がよく見られるよ」

「僕の説明の問題点のひとつは分かった。循環定義だね。ではあともうひとつは？」

学問の話になると僕は総じて口が回る。彼女のような美少女を前にしても怖気づかずにいられる。学問は僕を守ってくれる精神的な鎧だ。

「もう一つの問題点は、そもそも貴方の定義が間違っているという点」

「言ってくれるじゃないか。だって『走る』は『歩く』より速い移動だろう？」

「ゆっくり走るのと競歩並みに速く歩くのでは、後者のほうが速いよね」

「そうかな。それでも走るほうが速そうだけど」

「じゃあその場走りと歩行を比べてみたらどう？ 歩くほうが速いでしょ」

「確かに……」

「それにその場走りが走るの定義に入るのなら、走るの定義から『移動』という言葉も除かなければならない」

「そりゃそうだ」言われて納得する。「単なる国語の言葉遊びかと思ったが、案外論理学に近い厳密さがあるんだな」

「言語学は論理的な科学だから」彼女は謎めいた笑みを浮かべた。

「さて、それじゃあどう定義したものか」

「貴方の定義は日常的な直感においては間違っていない。ふつう走るほうが歩くより速いからね。だけど厳密な定義としては通らない」

「その場走りが許されるならその場歩きも許されるよな。両者の間の違いはなんだろう」お茶を啜る。「その場走りのほうがその場歩きより手足が動くのが速い。つまり、手足を速く動かすのが『走る』だ」

「そんな曖昧な定義だと『泳ぐ』も入ってきちゃうよ。それに、さっさかその場歩きをしたら、ゆっくりその場走りするより手足は速く動くと思うな」

「むう……」手詰まり感が出てきた。

「実際にその場走りとその場歩きをやってみれば、違いがわかるかもね」

綺夢に言われて立ち上がり、実際にやってみた。放課後のマイナーな部室で僕は一体何をしているのだろう。

だがやっているうちに、ふとあることに気付いた。

「うん？　そういえば歩いているときは常に両足のどちらかが床に着いているけど、走っているときは両足が宙に浮く瞬間があるな」

すると綺夢はばあつと顔を明るくした。「そう、そこなの！」

僕は再び椅子に座る。何か掴めた気がした。

「つまりこういうことか。『走る』と『歩く』の違いは速さにあるわけではなく、両足が宙に浮く瞬間があるかないかの違いにあると？」

満足気に頷く綺夢。彼女は「明察！」と言って手を打った。

「ふう、これで一件落着か。単語の意味をひとつ定義するのもえらく考察がいるんだな」「でもわたし、貴方はセンスがあると思う。言語学をやったことがない人は、すぐにこんな答えが出せないから」

素直に褒めてくる綺夢に僕は照れ、目を逸らした。目線の逃げ場所は本棚だ。ここには国語辞典が何冊も並んでいる。これらの辞典に刻まれた一語一語の定義もこんな問答の末に定められたものなのかと思うと何だか胸が熱くなった。

「そうか……そうだよな。ここにある辞典はどれも何万語という単位で言葉が載っている。そのひとつひとつがこういう考察を経て作られているのか」

綺夢はそれを聞くと嬉しそうな顔をした。まるで自分が褒められているかのような表情だった。

「まあここまで細かい考察は基本語にこそ見られるものだけだね。ただ、そう読み取れる感受性があるっていうのはすごいことだと思うな」

「いや、別に……」

「ううん、本当にそう思う。辞書のありがたみなんてみんな分かってないし、それどころか引くことすら面倒臭がるでしょう？　でも辞書っていうのは編集者のほか、言語学や語学の専門家たちが練りに練って編み出した考察の集積なの。いわば考察でできた塔よ。なんでもない単語の定義の中に、ものすごく深い言語学的考察が含まれているんだよ」

「そう思うと辞書って凄いな。今日初めて思った」僕は改めて綺夢を見た。「いや、辞書が凄いてことは語学好きの僕はもちろん分かっていた。でも語学屋の僕からすれば、

辞書はあくまで外国語を読み解くツールでしかなかったんだ。それを作っている裏方の苦労なんて考えてこなかった」

「それが分かってもらえたら嬉しい」

両拳の上にあごをちょこんと乗っけて、綺夢は微笑んだ。その仕草があまりに愛らしくて、僕はまた目のやりどころに困った。

「ふうん、なるほどね。これが言語学部の活動か。普段からこうして単語の意味の定義をしているの？」

「そういうことをするときもあるね。だけど言語学の分野は広いから、それだけじゃない。単語の意味を定義するだけだったら辞書部って呼んだほうがいいでしょ。今わたしたちがやったのは、言語学的にはそうだなあ……語彙論とか辞書学みたいなものかな」

「語彙論……なんだか分からんが、色々あるんだな」

湯のみを見ると空になっていた。

「そろそろお暇するよ。お茶もごちそうになったし、学生証のほかに『答え』も届けられたようだからね」

ついにようやく口がまともに回るようになって良かった。だがそれも学問という共通の話題があつてこそ。日常会話のレベルになると急激にだもってしまうのは火を見るより明らかだった。今のうちに撤退したほうが身のためだ。

まあ自分の人生の中で学年首席の美少女などという小説めいたキャラクターと話すことなど、後にも先にももうないだろう。今日が特別。非現実には足を踏み入れた特別な日。明日からまたふつうの日々が戻る。ふつうの受験生としての気だるく憂鬱な……。

立ち上がってドアノブに手をかけると、彼女は寂しそうな声で呟いた。

「今日はありがとう。学生証も、楽しい会話も……」

……楽しい？ 今楽しいって言ったか。あれが彼女にとっては楽しい会話だったのか。そもそも楽しかったというなら、なぜ声がそんなに寂しげなのだ。

——彼女は僕が去ることを望んでいない……？

心臓の鼓動が少し早くなった。

僕はドアノブを握った。握ったまま、数十秒が過ぎた。1分にも満たないのに、途方もなく長く感じた。

僕はなぜ部屋を出ない？僕はなぜドアノブを握ったままでいる？僕は綺夢に何を期待している？綺夢は僕に何を期待している？

刹那、かさつと紙を広げる音がした。

「ねえ……」

その声に戻ると、綺夢は彼女の肌のように白い紙を広げて立っていた。

「『広い国』って言えるよね？」

「え？」突拍子もない質問に戸惑う。「あ、ああ……そうだな」

「『広い公園』とも言えるよね」

「い、言えるな」

だからなんだと言うんだ。

「なんで国や公園は広いと言えるの？」

「そりゃ面積が大きいからだろ」

すると綺夢は大きな紙を広げて見せた。

「——じゃあ、どうしてこれは『広い紙』と言えないの？」

その言葉は僕の胸に深く突き刺さった。

僕はしばらく黙ったままドアノブを握っていた。

やがて口を開こうとした瞬間、綺夢は悪戯げに微笑んで呟いた。

「『答え』のお届け日は明日以降でお願いします」

それはつまり明日も僕に来いという——。

僕は黙ったまま下を向くと、小さく頷いてドアを開けた。

## <言語学部>

翌日は晴れていた。梅雨だというのに傘がいらないほどに。

だが僕の頭は曇っていた。謎の少女、初月綺夢。不可解な部活動、言語学部。ひよんなことから彼女に出会った僕は、この非日常にどう対処すればよいのか考えあぐねていた。

正直自分の進路のことで頭がいっぱいなのに、これ以上余計な悩みを抱えたくなかった。僕は理系クラスだが、語学が好きだ。大学では語学を専攻したいと思っている。

だがそうなると文転せざるをえない。しかしこの学校で文転といえばそれはイコール脱落ということの意味する。よって教師はそう簡単に文転を認めようとしな

い。それに将来の就職のことを考えても文系は理系に比べて選択の幅が狭いとか、底辺の大学だと営業ばかりだとか、あまり良い話を聞かない。正直僕みたいな内向的な人間に営業が務まるはずもない。

できれば大学に残って研究を続けたいが、今の世の中講師にすらなれないのが常と聞く。教授など夢のまた夢だ。研究だけで食べていくのは難しいだろう。

大人しく理系のまま進めばどこか適当な企業の研究室や開発部に潜り込めるかもしれない。少なくとも営業よりはずっと自分に向いているし、教授になるよりは遥かに敷居が低い。

もし文転するのだとしたら通訳や翻訳という道もある。語学好きの僕にはピッタリだ。あるいは語学系の出版社という道もあろう。だが通訳や翻訳は基本的に女性の職場だそうだし、男性の職業として見ると生涯賃金は低めだし、収入も不安定だ。語学系の出版社も語学書自体が売れないので悪戦苦闘しているらしい。

そんなわけで将来のことを考えるならこのまま大人しく理系で大学に進学するのが良いのだが、さしたる興味もないのにただ「よりマシなだけ」という理由で将来を決めてしまっているものだろうか。

こここのころそれですずっと悩んでいる。もう3年の6月だ。今更根本的な進路を決めるには遅いといってもいい。

そこにきてあの初月綺夢の登場だ。「走る」と「歩く」の違いなどという問題を出し、今度は「広い紙」はなぜ言えないかという問題を出してきた。彼女に関わる何とだか面倒なことが起こりそうだ。



だが、昨日の議論は面白かった。ああいう考察は嫌いじゃない。言語学とか言っていたが、あれはあれでなかなか面白い体験だった。

放課後。僕は言語学部に行くか行かないか悩んでいた。はっきりまた来いと言われたわけではない。来てもらいたがっているというのは僕の勝手な思い込みかもしれない。勘違い君にはなりたくなかった。

だが、なんとなくあの問題の答えが気になる。昨日あれから一晩考えてみて、自分なりの答えは出せた。これが合っているのか確認したい。

……いや、本当にそれだけか？

綺夢の姿が思い起こされる。155cm くらいしかない小柄な体。中学生と見紛うような華奢な体躯。幼い人形のような彼女はどこか寂しげだった。

僕は本当は彼女にまた会いたいのではないか……？

結局悩んだ末にまたあの部室へ来てしまった。

崩れた塔のポスターの前でしばらく突っ立っていた。

どうしよう。入ろうか。入るまいか。

そう考えた末、やっぱり入らないことにした。あんな問題なんかを真に受けてまたすごすごやってきた惨めな男という印象を持たれたくなかった。

踵を返したとき、ふいにドアが開いて、僕の心臓は飛び出しそうになった。

「あら、お客さん？」

ハッと振り向くと、そこには黒髪ロングの少女がいた。綺夢ではない。

「あ、いや……僕は……」

すると部屋の奥から「あ、昨日の」という声があった。綺夢だ。昨日と同じ位置に座っていた。

彼女は立ち上がると、とてとてと寄ってきた。思わず後ずさりしてしまう。

黒髪の少女は僕を見ると、「ああ、この方がみゆちゃんが言っていた方ね」と頷いた。「言語学部に遊びにいらしたの？」

やけに上品な喋り方をする子だ。雰囲気もお嬢様っぽいし、なんとなくしっくりくる。

「いや、そういうわけじゃ……。ただちょっと昨日の問題が気になって……」

声が急速にデクレッシェンドする。フェードアウトと言ってもいい。僕の声はBGMの終りの部分か？

「え？」

案の定、彼女は聞き取れなかった。

「いや、だからその……。てゆうか、君こそどこに行くところだったんだ」

「手を洗いに」少女は中を見て、「みゆちゃん、ひとつ椅子を出してあげてくださいな」と言うと、僕に「さ、どうぞ」と言った。

僕は困惑しながら中に入った。綺夢が椅子を新しく用意してくれたが、あまりにテンパっていたので昨日の席に座ってしまう。座面が暖かい。今まで黒髪の少女が座っていたのだろう。

「昨日の答え、持ってきてくれたの？」

期待に満ちた純粋な目で綺夢が僕を覗きこむ。

「ま、まあ……。いや、答えかどうかは分からないけど」

再び声がデクレッシェンド。綺夢は首を傾げる。

そうこうしているうちに黒髪の少女が戻ってきた。彼女は自分の椅子が取られたのを気にする風でもなく、僕の右手側に用意された椅子に腰掛けた。目の前が綺夢、右手が黒髪の少女という構図だ。

「あ、紹介するね。昨日言った、生徒会をやってる部員の折口乙女。わたしの友達。同じ3年だよ。文系クラスだから知らないかな」

「おりぐち……おとめ？」

変わった名前だ。娘に乙女と名付ける親の顔が見てみたい。娘が年を取ったときのことは考えなかったのだろうか。

僕は乙女を横見する。背は綺夢より高かった。体格は細身だが、綺夢と違って子供っぽくはない。綺麗な女の子といった感じだ。黒髪はストレートで、滝のように美しい。綺夢とはまた違った美しさがある。

「乙女は生徒会で書記をやってるの。生徒会がある日はこっちに来れないんだけど、普段はいるよ」

「そうなんだ？」

「それで、昨日の答えは出た？」

「『広い紙』と言えない理由だったね。僕が思うに、広いという形容詞は面積が大きいものにはしか使えない。国や公園のようにね。紙は大きかろうとしよせん数平方 cm しか面積がない。だから『広い紙』とは言えないんだよ」

乙女は話を聞きながらお茶を淹れに立った。綺夢はふんふんと面白そうに聞いていた。

「じゃあ、もし公園の面積と同じ大きさの紙を用意したら、広い紙と言えるの？」

「それは……どうだろう」僕は迷った。どれだけ大きくても「広い紙」と言えそうには感じられなかった。「言えない気がするが、そもそもそんな大きな紙を作るという前提がナンセンスだ。そんなの不可能だし、想像だにできない」

すると乙女がお茶をテーブルに置きながら、「私の心の限界が私の世界の限界である」と言った。

「え？」

僕が首を傾げると、「ヴィトゲンシュタインの言葉です」と返した。

「言語学者か？」

「ルートヴィヒ＝ヴィトゲンシュタイン。20 世紀の哲学者ですわ。『論理哲学論考』や『哲学探究』で知られています。

哲学書ですが、どちらも『言葉とは何か』、『意味とは何か』という問いを投げかけています」

「ともあれ今この場面においては、僕が想像できる紙の大きさが僕の世界の限界だという意味に応用したいわけだな」

言ってくれる。大人しそうな顔をしてなかなか人を喰った発言をする子だ。

「いいだろう。仮に 10m 四方の紙を作って屋上から吊り下げたでしょう。それでも『広い紙』とは言えない。『大きい紙』とは言えるかな」

「となると、貴方が言った『広いは面積の大きさを示す』という定義は偽になるね。だってその紙の面積は十分に大きいと考えられるもの」

「あ……」

そうだった。なに墓穴を掘っているんだ、自分は。

「むう……手詰まりだな。『広い』という言葉はどう考えても面積が関与していると思ったのだが」

「それ自体は間違っていないと思うよ。ただ——」人差し指をピンと立てる。「他に条件が足りない」

「条件……？」

「公園や国と紙の違いは？」

「違いと言われてもな……」

「コロケーションで考えてみようか」

コロケーションというのは単語と単語の組み合わせのことだ。例えば「傘を差す」とは言えるが「傘を開始する」とは言わない。「傘」は「差す」とは一緒に使われるが、「開始する」とは一緒に使われない。なお、一緒に使われることを「共起する」ともいう。

コロケーションは言語によって異なる。「傘を差す」は英語では open an umbrella という。英語では傘は開くものなのだ。このように、単語は他のある単語と組み合わさって使われる。そしてその組み合わせのことをコロケーションという。

英語にするとより分かりやすくなる。コロケーションは collocation と書くが、これは co（共に）-location（位置）が語源だ。まさに共起という原義を持っている。

さて国や公園と紙のコロケーションの違いだが、綺夢は僕に何を言わせたいのだろうか。しばし考えてみた。今までは「広い国」のように形容詞と名詞のコロケーションで考えてきたが、今度は視点を変えて名詞と動詞のコロケーションで考えてみよう。

「そうだな……例えば『公園にいる』とは言えるが、『紙にいる』とは言えない」

すると綺夢の顔が華やいだ。感情がすぐ表に出る子だ。どうやらこの方針で良いらしい。

「『いる』という動詞と共起できないのはどうして？」

綺夢の言葉に促され、「『紙』は『場所』ではないから……？」と答えた。

「明察！」

綺夢はパンと手を打った。どうやらこの「明察」というのは彼女の口癖らしい。昨日も同じことを言っていた。

「そう、公園と紙の違いは場所性の有無」

「場所性？」

「場所としての性質を持っているかということだよ。国も公園も場所だけど、紙は場所じゃない」

「つまり『広い』は『場所性を帯びたものの面積が甚大であること』を意味するというわけか」

「そう。それが『広い』の中心的な語義」

「中心的な語義？」

「ひとつの単語にはいくつか語義がありますわよね」乙女が注射を入れてくる。「『広い』には『顔が広い』のように比喩的な語義もあります。今定義されたのはあくまで『広い』が持つ中心的・本来的な語義にすぎません」

「単語というのは中心的語義を根幹として、様々な語義に広がっていくものなの」

「『顔が広い』は比喩的な語義なのか？」

「だって、その人の頭部が物理的に大きいわけじゃないでしょう？」

「確かに」

僕は腕を組んで天井を見上げた。

ふむ、面白い……。

「言葉というのは数学などに比べて曖昧な存在だと思ってたけど、だいぶ論理学のように厳密に定義することができるんだね」

「そうでもないよ。言語は数式に比べて遥かに扱いづらい。厳密に定義しても、すぐ例外が出てくる」

「例えば？」

「『広い』の中心的語義を『場所性を帯びたものの面積が甚大であること』と定義するのはひとつの解だけど、それだと『狭い』は『場所性を帯びたものの面積が甚大でないこと』と定義できるよね」

「ああ」

「そしたらなぜ『猫の額のように狭い』と言えるかという問題が生じる。猫の額は場所？」

「——じゃないな」

「でも『狭い』と言える。不思議だね。手は広いと言えないか言いつらいのに、額はなぜか広いといえる」

「なあ、実際の辞書では『狭い』はどう定義されてるんだ？」